

7 「人事評価システム改革」が肝

よりよい学校づくりのための塾からの提案⑦

花まる学習会代表 高濱正伸



◆居眠りが許される

公教育の授業そのものにかかわるチャンスを得て三年。なるほど、学校独自の文化だなと思つたことを書いておきたい。

例えば、研究会と称して、私の授業に対する質問や意見交換をする会を開いていた。そのこと自体はともありがたいことだ。実際に多くの先生方から、意義深い質問や、ご意見をいただいた。感謝する次第である。

ところが中に、意見を言うどころか、一人二人と居眠りする先生がいる。外部からわざわざ招いた客人との、授業の参考になることを話し合おうという場での居眠りという失礼な所業も驚きだが、もっと驚きなのは、そのことを校長なり教頭が、全く指摘したり叱責したりしないことであつた。そうか、こういう場面でも管理職が厳し

いことを言うことができない力が働いているのだなあと思つた。民間では全くもって考えられないし、そんなことをしたら「使えない」とみなされ、即減給ないしは配置換えを言い渡されるであろう。

◆やらない言い訳

多くの参考にもなるしありがたい意見の中に、こういうコメントが交る。「先生の授業を子どもたちが楽しみにしているのは分かるが、自分たちの普段の授業に、どう活かしていけばいいのかが分からない」「楽しい授業であることは確かだが、日常の授業とどうつなげるかは課題である」

もっともらしい。しかし、民間ではこのようなスカスカの「結局、だから何もしない」という言い訳をすれば、「顔を洗つて出直してこい」と上司から怒鳴られるであろう。

出たかどうか」評価される。評価は確実に蓄積され、人事昇級や、給与の上下などに直結される。

それが、学校では、非常に形式的な意見を述べたところで、あるいは意見どころか居眠りをしていて許される。要は、ぬるいし、そんな甘つたれた文化性こそが、「公教育を何とかしろ」の声につながっているのである。

◆難癖？

こういう意見も出た。「上位や中位の学力の子どもたちには、考えさせる面白い授業かもしれないが、ついていけない低位層の子たちにとってどうなのだろうか」

ほほう、と思う。では、あなたの授業では、本当にすべての子たちに、同じような結果が出るような指導をしているのか。絶対にそんなことはできないだろう。難癖ならば私の器の小ささの証明でもあるだろう、まじめにそう考えているならば、教育者としての目を疑う。

もとより、正規分布で存在する生徒の知力であるならば、いつでも「上にあぶれる子」や「下にあぶれる子」への対応は、大きな課題の一つであるが、公教育こそこの

数十年、このことに頼かぶりしてきたし、

そのことが「分数のできない大学生」などの「結果を出せていない問題」となつて指摘されてきたのではないか。この件での具体策は、また別稿で述べたい。

「指導対象者の力のバラツキ」については、塾であろうと日頃から課題である。思考力指導として、将棋や囲碁ではなくアルゴを選んだのは、わけがある。

将棋や囲碁は、ミスなどの要素はあるにせよ「必ず力のある方が勝つ」ゲームである。導入の仕方を誤ると、負け続けてくつたりやる気を失つたりすることにもつながる。

ところがアルゴは、まあ言えば麻雀に近いのだが、深い思考課題を提示し続けてくれる一方で、配られたカード次第では、つまり運次第では、弱い側も勝ってしまうこともしばしば起こる。このことで、より幅広く全員が「楽しい」「面白い」という気持ちを持ち続けられるのである。

いずれ囲碁や将棋などの厳密さを楽しんでいる子には育てたいが、小学生の初期ならば、アルゴは、ほどよい難しさを提示でき、より多くの子に思考を楽しむ機会を与える素材であると言える。だからこそ、

選び抜いて使用している。

◆人事評価システム改革を

このことは強調したいが、本当に素晴らしい先生が何人もいた。一人ひとり良い方ばかりだ。しかし、組織として明らかに問題は存在すると確信した。

社会人としてあるまじき行為をしても叱責できない上司と部下の関係が見える点や、本当に考え抜いて結果を出そうという日常ではないことを証明する意見が見られる点などに、全体としての濼みを見た。

公教育が尊敬され信頼される時代に戻るために必要なことは「時間数」や「教える項目」をいじることでは、全くない。授業力を中心とした、人事評価システム改革につきると思う。

一応授業を見学し合つて、努力目標を提示するだけというような腑抜けたシステムではなく、場合によっては退職勧告も含むような、給与や人事の処遇に、直結するシステムでなくてはならない。

先生が尊敬される第一は授業力である。いろいろなものを総替えすべき時代が来ているのではないだろうか。